

国語科教育における学習目標意識に関する一考察

竜田 徹

(2010年10月7日受理)

A Consideration of Goal Recognition in the Japanese Language Education

Toru Tatta

Abstract: It seems to be difficult for students to set their own learning goal or find a suitable method of learning in Japanese language class. That means there would be a kind of difficulty in fostering their goal recognition because it is not easy for students to describe and write down about their living language in their own words. In this study, through examining the idea of Mikiyu Aoki and my own practice with high school students, it found to be obvious what kind of goal recognition should be fostered in Japanese language education, as follows; (1) Reflecting one's living language. (2) Understanding what language ability is. (3) Designing or producing useful learning style. (4) Looking forward to working activities in Japanese class or taking an interest in them. The actual state of students' goal recognition is rich in diversity. These points, which is the feature of goal recognition, are of the essence to make the most of the diversity of students in Japanese language education.

Key words: Japanese language education, goal recognition, reflecting a living language, diversity of students, Mikiyu Aoki

キーワード：国語科教育，学習目標意識，言語生活の省察，学習者の多様性，青木幹勇

1. はじめに

「学習目標意識」とは、青木幹勇 [1963.8] 「国語科学習指導の目標——子どもの目標意識をめぐって——」に見られる用語を踏まえたもので、学習者ひとりひとりが抱く、学習の到達点についての、またそれに向けた学習の方法についての見通しを表すことばである。この論考で青木氏は、「たとえ子どもであっても、何かの学習に志向する場合には、何らかの目標意識、つまりこのように学習して、あそこに到達しようと思意識し、その意識をもって学習することを期待しなければならない」¹⁾と指摘している。「学習目標意識」が明確な場合、学習者ひとりひとりは、その「学習目標意識」をあたまの一隅に置きながら学習に臨み、それに立ち向かうようにして学習を進めることができる。

本稿の課題は、学習者の多様性に即した国語科授業を実現するための手掛かりとして、国語科教育におけ

る「学習目標意識」のあり方を考察することである。以下では、まず、「学習目標意識」を取り上げる理由を明らかにしたのち、「学習目標意識」について論じた青木氏の論を取り上げ、国語科教育における「学習目標意識」のあり方や課題について考察する。さらに本稿後半では、稿者の実践によって得られた資料（高校一年生の学習目標意識の実態）も加えて、「学習目標意識」のあり方を実践的に考察する。

2. 学習目標意識を取り上げる理由

本稿で「学習目標意識」（以下、目標意識と記す）を取り上げようとするのは、これが、国語科教育において学習者ひとりひとりのちがいを踏まえた学習を実現するための手掛かりになると考えられるからである。

ことばの力——話し、聞き、書き、読む「言語活動力」は、児童・生徒たちのすべてに、確実に育てなけ

ればならない²⁾。しかし、すべての人たちが、同じようなペースで、それらの力を身につけていくわけではない。たとえ同じ学校の、同じ学年、同じ学級、同じ授業に集っていても、学習者ひとりひとりの言語生活の実態や、言語能力の実態は、さまざまである。こうした学習者の多様性についての明確な認識を、まず、大切にしなければならない。ところが、現実の国語科授業では、多くの場合、一人の教師が、ある同一の目標に向けて、ある同一の教材を用いながら、その時間の学習指導を展開していくことになる。ここに、国語科授業がもつ、克服しがたい困難がある。それは、学習者ひとりひとりによる主体的な学習を実現することの難しさ、いわば個別学習の難しさである。「国語教育の指導が最初から最後まで集団指導に陥って、学習者ひとりひとりの学習に徹しないうらみがある」³⁾と言われるように、教師の発問や説明に合わせて課題を考え、板書を書き取っていくような、一斉的で画一的な授業では、学習者に個別学習を促すことは難しい。学習者ひとりひとりの実態は多様であるにもかかわらず、その多様さに応じた授業展開は、容易に実現できない。学習者ひとりひとりが「みずからのペースで、足どりで」⁴⁾ことばの学びを進めていけるような学習指導過程を構築することは、簡単なことではない。

この困難を克服するためには、なにが求められるのか。それは、単に、教師が学習者の言語生活や言語能力の実態を把握することではない。確かにそのことにも大切だが、それ以上に求められるのは、学習者ひとりひとりに、みずからのことばの実態や、みずからに合った学習のペースを捉えさせていくことであろう。自分の言語生活や言語能力の実態を知り、今後の見通しや学習の進め方を考えること、すなわち「学習目標意識」を持つことによって、学習者は、国語科授業により主体的に取り組めるようになると考えられる。

しかしながら、「子ども」の持っている言語能力の実態を把握しようとする試みそのものは、戦後の教育の出発以来様々な形で行われてきた。しかし、(…中略…)子どもの「学習目標意識」の検討は等閑視されてきたと言っても言い過ぎではない⁵⁾と言われるように、国語科教育においては、学習者の「言語能力を把握しようとする試み」はあっても、「学習目標意識」を把握しようとする試みは、十分に行われてこなかった。その結果、「このように学習して、あそこに到達しよう」という目標意識は、学習者たちのものというより、むしろ、教師たちが抱くものになっているように思える。国語科教育における「学習目標意識」の育成は、学習者の多様性に応じる上で有効だと考えられる一方で、その実現には課題もあるとみられる。

国語科教育における「学習目標意識」とはどのようなものなのか。また、それを学習者のものとしていくには、どのような課題があるのだろうか。

3. 学習目標意識の性格とその背景

3.1. 学習目標意識の性格

まずは、目標意識について論じた青木氏の論考を考察したい。青木氏は、国語科教育における目標意識のあり方として、どのようなものを想定しているのか。

わたしたちが、子どもたちに学習のめあてをもたせるのは、多くの場合、ある教材を学習させ指導するときまたは、テストをやってみようなどとき……といったような限られた一時的なことが多いように思います。まったく無目的、教師の引き回すままに、学習させていくのに比べて、こういう目標のもたせかたもたいせつでしょう。

しかし、そうした、その場、その時の目標でなく、国語の学習全体、自分の国語をどうひきあげるか、それも、単なるテストの成績ということだけでなく、(もちろんこれも有効に生かし)国語の学力というものがどういうものであるかをわからせながら、自分を引きあげさせる現実の具体的目標をもつようにしていきたいと考えます。そうした目標意識は単に一教材の読解、ひとつの作文の指導などでは育ちません。国語指導の具体的、全体的な指導を通しながら、個々人が広い視野から、自分の国語学習を見通し、それを引きあげさせていくようにしたいものです。

目標は上から与えられるものではなく、学級の実態に即し、他方教師の見識において求められるべきであります。いや、目標は教師だけのものではありません。子どもと教師の氣息、気脈、認識の通じあったものの中からも求めたいものです。

低学年では、まず、個々の学習について、ねらいをもたせるようにし、中学年、とくに高学年になれば、国語科の指導はもちろん、その他の指導の中においても、自分のことばの生活をみつめ、それを、ああいうことができるようにしよう、こうやってみよう、具体的な学習の実践に展開していこうとする子どもに育てたいものです。教師は、つねにそうした目標意識を触発するとともに、子どもたちのそれを察知し、ゆたかな資料(子どもの発言、テスト、感想、作文など)を手元をもって、自分の指導目標を修正し、実践の中に生かしていかなければならないのではないのでしょうか。ここに、新しい学習目標のとらえ方があるのだと、わたしは考えます。⁶⁾

この引用文において、青木氏は、目標意識は国語科

授業で発達段階に応じて育成するものであると捉え、そのための条件とでもいえる点をいくつか記している。

- 第一に、目標意識は、「自分のことばの生活をみつめること」から生み出されるものである。学習者自身の言語生活と結びついたものである。
- 第二に、目標意識は、「国語指導の具体的、全体的指導を通して」生み出されるものである。一授業・一単元で育つものではなく、全体的・累積的な指導によって育つものである。つまり、国語科授業外の場における指導も、青木氏の射程に収められているといえる。
- 第三に、目標意識は「具体的な学習の実践に展開」されるものである。国語学習のなかでみずからの目標意識に取り組むことが求められている。
- 第四に、目標意識は「単なるテストの成績」とは別物である。青木氏は、試験の成績に一定の有効性は認めているものの、それとは別に「国語の学力」を考えている。目標意識を育むためには、「国語の学力というものがどういうものであるかをわからせ」る必要があるとしている。

青木氏の論じた目標意識は、これら四つの点で特徴付けることができる。一見するに、目標意識は、学習者が主体的に抱く「学習のめあて」や「学習目標」と同じものとも捉えられそうだが、それらとは明確に異なる点がある。

まず、目標意識は、授業ごとに立ち上げるものではなく、国語学習の全体性・累積性を見通すなかから生み出されるものである。一般に、「学習のめあて」や「学習目標」と呼ばれるものは、個々の単元や授業のために設けられる、単発的な目標を指すことが多い。しかし、目標意識は、個々の単元や授業の枠を越え、国語学習全体を視野に収めた概念である。

また、目標意識は、教師から与えられるものではなく、学習者が主体的に把持するものである。青木氏は、「新しい学習目標のとらえ方」として、学習者ひとりひとりの実態に合わせて、絶えず軌道修正されたり、新しく取り入れられたりするような目標設定のあり方を論じている。目標は学習者とともに立ち現れるものであるというこの考え方が、目標意識を論じる根拠を成しているといえる。

このようにして、青木氏は、学習者の目標意識を「触発」したり、「察知」したり、把握したりすることで、彼らの目標意識が生きる国語科授業を作ろうとした。目標意識の育成は、授業を、教師のためではない、学習者のための時空間として成立させるための方法であった。学習者を使うところではなく、学習者が使うところとして、授業を成立させようとしたのである。

3.2. 学習目標意識の背景

青木氏が、「目標」を「子どもと教師の氣息、氣脈、認識の通じあったものの中からも求めたい」と考える背景には、学習者を国語科授業の主体者として重んじる姿勢があると考えられる。目標意識と同様の考え方に立つ青木氏の実践に、「授業感想を書く」という実践があるが、ここにも、学習者の立場に立って授業を構想・改善しようとする姿勢を見出すことができる。

わたしの評価についての研究は浅いのですが、何とかして、子どもの学力はもちろん、学習をすすめる力、学習の態度なりを、固定した形でなく、流動のすがたでとらえたい。結果だけでなく、可能性のまま、いいかえると、なまのまま、総合的に生きてはたらしきをもつ主体としてとらえられないものだろうかと考えてきました。そうしたものが得られたら、いまのテスト的な評価、観察評価に加えて、指導計画、指導改善についての、いちだんと、効果的な資料になるにちがいないと考えるのです。(…中略…)

子どもたちは、いったい、わたしたちの指導をどのようにうけとめているか。ある教材、ある一時間の指導を、どのようにわかってきているか。反発を感じているところはないか。実のところ、たいくつでたまらないのではなかったか。級友の発言がどのように、ひびきあっているのか。わたしは、それを知りたい。そうしたことについて、子どもの真意、子どもの理解、子どもの抵抗がわかる方法はないか。もし、そういうものがわかるとなれば

- ・わたしのとりあげた指導目標の当否が、批判できるでしょう。
- ・教材に対する子どもの反応の心理的、論理的過程がわかるかもしれません。
- ・指導方法に対する子どもの反応の、心理的、論理的過程がわかるかもしれません。
- ・指導の中で、子どもがどのように成長していくのか、どのようにとまどい、停滞しているのか、そんなすがたも具体的にとらえられそうです。
- ・こういうことが明かになってくれば、指導法の盲点、改善点もはっきりしてくるはずです。

さて、このように、子どもたちがどのように学習したか。指導をどう受けとめているかを知る方法ですが、それをテストのような分析的な方法、外からの観察法的方法によらず、できるだけ、全一的に、具体的に、生態的にとらえるにはどうするか。

わたしは、いま、つぎのようなことをやっています。それは、至って素朴な方法です。一教材の指導を終わろうとするところで、子どもたちに、「授

業感想」(学習感想といってもよい)を書いてもらうというやり方です。⁷⁾

「授業感想を書く」実践では、教材文やノートなどを参考にして、「授業をよく思い出させるように」しながら、記録文や手紙文(例 教師へ・友人へ)、対話文(例 母親と授業について話す)など、自分が選んだ表現形式で、文章を書く。その内容は、「当面した、文章についての理解及び、理解過程」「教師の指導によって開発をうけたこと」「友人の意見によって解決を得たこと」「わからなかったこと、学びのこしたこと」「学習の中で意識された自分の成長」などである。ここでは、「自分の成長をみつめ、それを知り、それを喜ぶというようにすること」⁸⁾が大切にされている。

「授業感想を書く」実践には、いくつかの点で、目標意識の育成と共通するものを見出すことができる。その一つは、学習者を実態に即したかたちで把握することである。「授業感想を書く」では、「学習をすすめる力、学習の態度」を、「流動のすがたで」、できるだけ「生態的に」捉えようとしている。一方の目標意識の育成においても、青木氏は、「目標」は「子どもと教師の氣息、気脈、認識の通じあったものの中からも求めたい」とし、学習者の目標意識をもとに「自分の指導目標を修正し、実践の中に生かしていかなければならない」と述べていた。これらに通底するのは、学習者の実態の具体的・現実的な把握をもとにして国語科授業を考えていこうとする、学習者重視の姿勢である。

もう一つの共通点は、学習者自身にみずからの成長を跡づけさせることである。いま述べたように、青木氏は、一単元・一教材ごとに、学習者に「授業感想」を書かせ、みずからの成長を捉えさせた。一方、学習者の目標意識を把握する方法として用いられたのも、じつは作文であった。「わたしのことし(今年)の勉強はどうだったか」というテーマで作文を書かせることによって、一年間の自己評価の裏返しとして、学習者個々の目標意識を見出そうとしたのである⁹⁾。一単元か、一学年かというスパンの違いはあるものの、書くことを通して、みずからの成長をみつめることを重視する点において、両者は一貫しているといえる。

以上のように、青木氏は、学習者を「流動のすがた」のままに把握し、それを指導の改善に生かしていこうとした。また、書くことを通して国語学習による自分の成長を学習者自身に跡づけさせ、国語学習の成果や見通しを持たせようとした。これらは、国語科授業の場を学習主体である子どもたちにとっての意味ある時空間にしたいという理念に貫かれている。こうした考え方を背景にして、青木氏は、目標意識を育成する意味や方策を問い深めていったのである。

4. 国語科教育における学習目標意識の課題

しかしながら、国語科教育において学習者の目標意識を育てることは、容易なことではない。他教科に比べて、国語科には、学習者が目標意識を把持しにくい構造があると思われるからである。

ここで試みに、小中高時代の経験をふり返ってみると、学習者の目標意識が自然なかたちで成立していたように思われる教科がある。たとえば保健体育科である。体育の授業では、ある運動競技の上達に向けて、自分の目標を作り、それに向けてなにを改善すればよいかを考える、という手順を、教師や級友を手掛かりにしながら、自然と行うことができた。その理由の一つは、ひとりひとりの身体能力や運動能力はちがっているということが、だれにも自明であるからであろう。それゆえ、無謀な目標を教師から強要されることもなければ、自分で設定することもなかった。とことん、ひとりひとりに応じた、達成可能なことが求められる授業であった。また、もう一つ理由として考えられるのは、学習者にとっての目標の考えやすさである。体育の場合、目指すことの多くは、時間や距離や回数などの客観的で可視的な指標によって表すことができる。○○さんに勝つ、○○くんのように上手になる、など、級友を基準にした目標も立てやすい。これらの理由から、体育の授業においては、学習者の目標意識が、比較的成立しやすいのではないと思われる¹⁰⁾。

一方、国語科の場合、学習者ひとりひとりの言語能力のちがいに関する自明性も、打ち立てられる目標の客観性・可視性も、学習者の立場からみれば比較的薄弱であるようにみえる。それが、目標意識を持ちにくくしているのではないか。もとより、国語科にも、定期試験や模擬試験などの結果や通知票の評定はある。しかし、点数や評定は、一回一回の具体的・現実的な学習実践の目標としていく指標としては限界がある上、授業における学習者の「流動のすがた」を捉える指標としても十分でない。もちろん、点数以外にも数値で設定できる目標はある。だが、それは学習者にとって、語彙、漢字、字数、文章量、本の冊数といった狭い範囲に限られる。また国語学習の場合、自分の周りに良い話し手や聞き手、書き手や読み手がいるのはわかっても、どのようにすれば自分もそうなれるのかが、学習者にはわかりにくい。こうしたさまざまな要因ゆえに、国語科は、他教科に比べて、「よくわからない、あいまいな教科」¹¹⁾だというようなレッテルを貼られてしまうのだろう。つまり、国語科学習には、どこを目標してなにをすることなのかのわかりにくい面があ

るということである。

このように、国語科教育において、学習者が自分に応じた現実的・具体的な目標を認識しにくい面があることは否めないと考えられる。この点で、国語科教育における目標意識の育成には、他教科にはない難しさがあるのではないだろうか。その困難は、青木氏が学習者に試みた「わたしのことし（今年）の勉強はどうだったか」の作文の結果にも表れている。

わたしは、昨年度末、四年生の子どもに、つぎのような作文を書かせてみました。それに、かりに題をつけるとすると、「わたしのことし（今年）の勉強はどうだったか」というようなことにするかと思います。できたものを読んでみると、大部分の子どもは、教科の学習について、ひとわりとさりと反省、感想といったようなものを書いていました。事前の指導はかなりしておいたのですが、書かれたものは、いわば通りいっぺんのものになっていて、やや期待はずれでありました。ことに自己評価の観点、通知表の5, 4, 3, 2, 1といった評点にこだわっているものがかなり多く、自分の国語の学習、国語の学力をどう考えるべきかというような視野に立って考えている子どもが少なかったことは残念なことでした。四年生という学年段階で、そうしたことに多くをのぞむことはむりであり、むだなことかとも考えましたが、わたしの学習指導の立場からの要求は、もう少し高いところにあったのです。¹²⁾

一年間の学習をふり返った子どもたちの文章は、案外、通知表の「評点にこだわっているもの」が多く、「自分の国語の学習、国語の学力」を跡づけ、見通したものは少なかったと記されている。青木氏が望んだ「自己評価の観点」は、「評点」によっては捉えられないものであった。言い換えれば、自分のことばの生活・ことばの学習・ことばの力を、数値でなく自分のことばによって考えさせ、捉えさせようとしたのである。みずからの言語生活・言語能力との生きた脈絡のなかで目標意識を把持するためには、ことばで自分をふり返る作業がどうしても必要になる。その作業は、学習者の言語生活を対象とする国語科教育において、学習者にぜひとも求めたいことである。しかし、青木氏の実践からわかるのは、目標意識をことばによって握らせることは容易ではないという、国語科教育における目標意識の課題である。

目標意識を育成するとは、単に、授業で教師が提示した「めあて」を復唱させたり、学習者に目標を言わせたりすることではない。また、目標意識ならどのような内容でもよいというわけでもない。では、国語科教育における目標意識のあり方、またその育成のあり

方とはどのようなものなのか。

5. 帯単元学習にみる 高校一年生の学習目標意識の実態

5.1. 帯単元学習の概要

国語科教育における目標意識のあり方に関しては、すでに、青木氏の論を考察することによって四つの条件を取り出すことができた。ここからは、稿者の実践によって得られた資料を取り上げ、目標意識のあり方について実践的に検討していきたい。

稿者は、2009年度一年間、非常勤講師として、広島県内のある県立高校に勤務し、一年生の「国語総合」の授業を担当した。その最後の授業で、稿者は、青木氏の目標意識の考え方に基づいて、生徒たちに、授業で一年間続けてきたある取り組みについてのふり返りを書かせてみた。その取り組みというのは、授業のたびに新聞記事を読んでそれに関するコメントを書くという、授業開始直後の約10分間を用いた、帯単元学習である。稿者が選んできた新聞記事を印刷したプリントを、生徒たち全員に配り、生徒たちはそれを読んで、プリントの余白に感想や意見を書き込む。この「コメント王」と呼んでいる取り組み¹³⁾を、生徒たちと、週2時間、それを一年間、計50回余りにわたって続けてきた。そのしめくくりとして、三月の終わりの授業で、「①コメント王を通して、あなたにどんな力が身についてきたと思いますか。あるいは、あなたのどんなところが鍛えられた、磨かれたと思いますか」「②コメント王への要望や提案があったら書いてください」と生徒たちに問いかけ（板書して）、10分ほどの時間をとって、プリントに書かせた。一年間の取り組みを自己評価させたということである。

先述したように、自己評価は目標意識の裏返しである。したがって、学習者のふり返りを検討すれば、彼らがどういうかたちで目標意識を抱いているのかを明らかにすることができる考えた。

なお、稿者の取り組みは、国語学習全体ではなく帯単元として継続した一部分を取り上げている点、高校一年生を対象としている点、比較的短めの作文を書かせた点において、青木氏の取り組みとは異なっている。だが、一年間継続した取り組みに対する学習者の自己評価は、たとえ帯単元的な取り組みであっても、彼らが抱く目標意識の実態を明らかにする上で、有力な手掛かりになると考える。また、青木氏が対象とした小学四年生と比べて、高校一年生は、みずからを客観的にまなざすメタ認知能力が比較的発達している。その意味で、書かれた分量は比較的少ないとしても、

目標意識の実態を捉える資料として、不足はないと考える。

一年間で「蓄積」してきた言語経験を確かめ、跡づける作業は、学習者にとって、それまでの学習で得たものを整理し価値づけるために大切であるばかりでなく、それ以降の国語科学習に意欲的に取り組む上でも効果的な作業である¹⁴⁾。一年間の取り組みを通して、高校生たちは、自分の国語の学習や、自分のことばの力を、どのように考えているのだろうか。

5.2. 高校一年生の学習目標意識の実際

5.2.1. 過去と現在の比較

学習者のふり返りは、国語科教育で育成すべき目標意識に関して、多くの示唆を与えてくれる。以下では、生徒の書きものを考察し、目標意識のあり方としてわかってきたことを、四つの点にまとめた。

その一つめは、ふり返りのなかに、以前の自分の状態との比較が書き記されていることである。学習に取り組む前には、自分のことばの力やことばの生活はこのようなものであったが、学習に取り組むことによって、言語能力や言語生活が、より確かで、豊かで、深い方向に変化してきた、というように、生徒たちは、過去と現在を照らし合わせるかたちで、みずからの成長を跡づけていることがわかる。次に挙げるふり返りには、そのことがよく表れている。

〈A〉¹⁵⁾ 何気なく見ていたものに対して立ち止まり、思いをはせるようになりました。何事にも感想がもてるようになりました。相手に伝わりやすいように文章が前よりかはうまく書けるようになったのではないかと思います。

〈B〉^① 今まで文章を読むのはあまり好きではなかったけど、コメント王の文章はおもしろい文章もあるし、今まで注目したことのないところにピンポイントでついているものもあって、トンチが少し増えた気がするし、文章が好きになりました。それから言葉の言い表し方も学ぶことができたと思います。

〈C〉^① コメント王をする前は、新聞記事などを読む時は、ふつうに読んでいただけだったけど、コメント王を始めてからは、この記事にコメントするならこんな事を書かなあ。とか、いろいろな事を考えながら読むことができました。また、筆者の様子なども考えるようになりました。同じ記事でも、他の人のコメントを聞くことで、自分とは別の観点からその記事を見ることができました。

「コメント王」がねらいとするのは、どのような文章に出会っても、それを一度読んでみて、何らかの感想や意見を持てる生徒を育てることである。〈A〉の

ふり返りには、その成果を確かめることができる。また、「コメント王」で用いる新聞記事は、学習者の書く意欲を引き出すことができるように、配慮してきた。〈B〉の生徒は、取り上げられる新聞記事に「おもしろさ」を感じ、「トンチが少し増えた気がする」という独特の表現を用いて、自分の成長を跡づけている。さらに、「コメント王」では、毎回、前回のコメントを紹介する時間を設けてきた。生徒たちが書いたコメントのなかから授業者がいくつか選んで紹介する、事後指導の時間である。〈C〉のふり返りはその点に触れ、「他の人のコメントを聞くこと」の重要性をはっきりと捉えている。

加えて、三つのふり返りは、いずれも、「前より」「今まで」などの表現を用いて過去をふり返り、それをもとに、いまを考察している。〈A〉では相手に伝わりやすい文章の書き方について、〈B〉では読むことや文章への好悪について、〈C〉では新聞記事の読み方について、それぞれ、以前の自分自身との比較を行い、成長したところを見つけている。自分の成長を見つけることにそれほどためらいがなく、見つけたことに自信や信頼を持てるのは、それまでの学習による確かな蓄積があるからである。一年間の学習の積み重ねによって、学習者は、以前の自分の状態との比較が促され、そこからの変化を、より自然なかたちで書き記すことができたと考えられる。

5.2.2. 国語科授業外での言語生活の省察

二つめに指摘できることは、国語科授業を取り巻くみずからの言語生活に言及されていることである。国語科授業で取り組んでいることが、国語科授業外の、家庭などにおける言語生活に、良い影響を与えているという気づきが、ふり返りに記されている。たとえば次のようなものである。

〈D〉^① あまり新聞を読まない私だったが、新聞を開くようになった。見出しを読んで興味のある物を読むまでに成長した。次からは、色んな記事も読みたい。

〈E〉^① やっぱり（新聞を読むことが少ない私にとって）「新聞を読む」という力がついたというのが一番だと思う。そんなに私はまだ新聞がすらすら読める訳ではないが、家でくつろいでいて新聞を目の前に見つけたとき、「最近ちっちゃい新聞記事学校で読んどるし、ちょっとだけ読も。」という気持ちになり、少しずつ新聞を読むようになってきたのも、良かったと思う。

〈F〉^① 実際にできるようになったかは別として、記事をかいた人が一番伝えたいことを探そうとするようになったし、何より、読むことが苦手で嫌いだっ

たのが、好きになりました。得意じゃないけど模試の現文をとくのがたのしみになった。

〈G〉② ・新聞部が発行している新聞をコメント王に使ってほしかったです。・毎回、先生の独だんで「今回のコメント王」を決めて発表する。¹⁶⁾

〈D〉と〈E〉の生徒は、ともに、家庭で「新聞を開く」ようになったことを報告している。新聞を教材化したことの効果が表れているといえる。〈D〉の「次からは、色んな記事も読みたい」という一言には、この生徒の目標意識がはっきりと読み取れる。〈E〉のふり返りからは、学校で新聞記事を読むことによって、家庭での読むことが促されている様子が、よく伝わってくる。〈F〉の生徒は、模擬試験で出題される現代文を「とくのがたのしみになった」と書いている。文章を読むことへの抵抗が取り除かれたことを、授業内外のさまざまな面で感じているのだろう。〈G〉の生徒は、取り組みへの要望として、みずからが所属する「新聞部が発行している記事」を使ってほしかったと書いている。国語科授業とクラブ活動が、この生徒のなかで、有機的に結びついていたのだろう。

国語科で身につけることばの力を、「生きて働く力」として、国語科授業外の言語生活に生きるものとすることは、国語科授業の課題の一つである¹⁷⁾。しかし、ここに挙げた生徒たちは、その課題を乗り越え、国語科授業と自分の言語生活とをうまく結びつけている。学習者は、国語科授業を意味づけるなかで、自然に、国語科授業の周囲へ、外へと思いをめぐらしていく。こうした、自分の言語生活を省みる点は、他教科にはない、国語科教育における目標意識の独自性である。

5.2.3. より良い学びを創造する態度

三つめは、国語科授業をより良い学びの場にしようという態度がうかがえることである。国語科授業における取り組みを、より有効なものに改善しようとすることである。以下のふり返りには、国語科授業や「コメント王」の取り組みに、みずから働きかけようとする態度を読み取ることができる。

〈H〉② 一人一人が文章をつくって、みんながコメントをする。そうすることによって、自分や他の文章の良点、欠点を知り、力を伸ばしていくことができると思うから。

〈I〉② 授業の内容に沿っている新聞記事を読むと、授業の内容が深まると思う。

先述したように、稿者は、ふり返りにあたって、「②コメント王への要望や提案があったら書いてください」と生徒たちに問うた。したがって、この取り組みへの改善案が出されるのは、ある意味で当然の成り行きである。実際、「自分たちが記事を持ち寄る」「書いて

たあと近くの人と話し読みする」「先生のコメントにまたコメントする」「次回読みたい分野を記入する欄を設ける」など、具体的な提案がいくつも出てきた。しかし、ここに引用した二つのふり返りには、他にはない特徴がある。それは、改善案の意義を打ち出していることである。〈H〉では文章を書く力が高められる可能性が見出され、〈I〉では授業の内容理解の深化が目指されている。このように、改善点を方法的に提示するだけでなく、なぜそう改善すると良いのかが自分なりに考えられ、ことばの学びが見通されている。

国語科授業のなかで行われている取り組みを、こんなふうに変更することによって、こんなことばの力を身につけていくことができるのではないかと。こういった学習者の思いは、国語科教育における目標意識そのものである。このように、国語科授業にコミットし、より有効な学びを創造しようと思えることができるのは、学習者自身に、授業を動かしてゆく主体的な存在としての自覚が生まれているからだろうと考えられる。

5.2.4. 国語科授業に対する「したしみ」

最後に、四つめに指摘できることは、国語科授業での取り組みや、教師に対する、「したしみ」のようなものが、生徒たちのふり返りのなかに表現されているということである。ここで「したしみ」というのは、国語科授業での取り組みや、その取り組みにおける教師の活動に対して、生徒たちが、楽しみに思ったり、大切に感じたり、興味や関心を持ったり、親近感を覚えたりすることを意味するもので、「愛着」というほど強くはなくても、それにほど近い感覚である。「したしみ」は、生徒たちのふり返りに書き記された、稿者の指導に関する言及や、「コメント王」の活動そのものに触れた言及によって、捉えることができる。たとえば、次のようなふり返りが挙げられる。

〈J〉① まず、社会の状況を把握し、それについて考えることで、物事を記事の内容も踏まえ、客観的にみることができるようになりました。先生に、常体で書いたり、「思う」ととってみたりしたら良い、とアドバイスをしてもらえたおかげで、自分の文章、言葉をどう改善すれば、より他者に伝えることができるのか分かり、文章力が鍛えられました。文章を速く読み、その上で、その記事の重要ポイント、注目すべき所を、自分なりに探し考える力が、一年間かけてついてきたのではないかな。② コメント王は楽しかったです。仲間意見を聞いたのはすごく良かったです。コメント王の記事について皆で話しあってみたらもっと広がった考えもでてきた気がします。でもコメント王は私の中で「楽しみ」になっていました。

〈K〉① 新聞がちょっと好きになった。政治とかそんないいから、こんなコーナーばっかりの新聞があったらなと思った。何気なく授業の最初の5分で行われてきたことだったが、これが結構楽しみだった。今の自分の30%ぐらいはコメント王でできてるかもしれない。

〈L〉① 良いコメントをみんなで聞いて、新たな考えを生み出せる力がついた。あと、コメント王が続くにつれて、先生はどのような考えで新聞を選んでいるのか気になった。

〈M〉① 最初、入学したときの授業で「コメント王でナニ？」とか思っていました。ふだんテレビ欄しか見ていなかった自分が、新聞の記事を読むようになった。② 新聞の記事を読んで、竜田先生が作った問題を解くと、もっと国語力UPしたような気がする。

〈N〉② 先生がつくった記事（日常的に思ったこととか）でコメント王をやってもおもしろいと思う。

このうち〈J〉の生徒は、短時間で長い文章を書き上げる力をもった生徒である。毎回、長文のコメントを書くことができた。その力がさらに広がるよう、この生徒には、しばしば、文章の書き方に関するアドバイスをすることがあった。「コメント王」では、書き込んだプリントを授業者が回収し、生徒たちのコメントにコメントを付けて、次の授業時に生徒たちに返却するという処理を、毎回行ってきた。その処理の時間は、生徒たちひとりひとりのことばの力を把握し、それをより確かで、豊かで、深いものにしてゆくためにはどうすればよいかを考えるための時間でもある。

〈J〉と〈K〉のふり返しには、ともに、毎回の「コメント王」の取り組みが「楽しみ」だったと書き記されている。その取り組みの時間を「楽しみ」にするという気持ちは、学習の継続性や、学習による蓄積から生まれる、学習を発動させる重要な契機である。また、継続や蓄積の効果は、〈L〉の生徒の、「コメント王が続くにつれて」という部分にも表れている。「先生はどのような考えで新聞を選んでいるのか気になった」というふり返しには、この生徒が、学習の継続によって、授業者と同じような立場に立ち、「コメント王」の取り組みそのものに関心を寄せていった様子を読み取ることができる。

〈M〉〈N〉のふり返しにも、授業者への言及が認められる。〈M〉は、新聞記事に関する問題を授業者が作成することを、提案している。また〈N〉は、授業者が作った記事を「コメント王」の教材にすることを、提案している。いずれも、生徒たちの側から、授業者を「コメント王」の取り組みに巻き込んでいこうとし

ているところが興味深い。これらの生徒たちは、「コメント王」の取り組みを、自分のことばの学びの場として把握することができている。このように、国語科授業で行われる取り組みに対する「したしみ」は、授業のなかでみずからの目標意識に基づく主体的な国語学習を展開していくための、入り口となるものである。

5.3. まとめ

以上に、生徒たちによる一年間の国語科授業のふり返しを手掛かりとしながら、四点にわたって、国語科教育における目標意識のあり方を見出してきた。最後に、これらを青木氏の指摘と合わせて検討したい。

まず、先述した青木氏の論考の考察では、次の四つの点が、目標意識の条件として掲げられていた。

- ①言語生活を見つめていること
- ②全体的な国語指導によって育まれること
- ③学習実践へと展開できること
- ④点数や評定とは別の形で国語の学力を捉えること

また、稿者の取り組みによって得られた、高校一年生の実態からは、国語科教育における目標意識のあり方として、次の四つの点を指摘することができる。

- ⑤過去と現在の比較
- ⑥国語科授業外での言語生活の省察
- ⑦より良い学びを創造する態度
- ⑧国語科授業に対する「したしみ」

以上、便宜上番号を付して、八点を掲げた。稿者の実践によってわかったことのうち、言語生活を省察するという点（⑥）は青木氏の指摘（①）と重なる項目であるが、その他の⑤⑦⑧の三点は、青木氏の指摘を深化・拡充する、本稿によって新たに指摘できる点である。

そのうち、過去と現在を比較すること（⑤）は、みずからの言語生活や学習態度の変化を捉えさせ、目標意識を促す方法として効果的である。その際には、比較の観点が点数や評定に傾かないようにするためにも、国語の学力とはなにかについて、学習者自身に考えさせる機会を設けていくことが必要だと考えられる（④）。たとえば、小学四年生の目標意識を検討した青木氏は、「国語学習の領域をちゃんとわきまえていること」が「自分の学習に目標をもつ土台になる」¹⁸⁾と述べ、国語科の領域に対する理解が目標意識を育むことにつながると指摘している。国語ではどんな学習をするのか、国語の学力とはなにかについて、発達段階に応じて、学習者に気づかせていくことは、目標意識を育てる上で効果的な方法である。

また、国語科授業をよりよい学びの場へ押し上げようとする（⑦）は、みずからの目標意識を学習実践に展開すること（③）を、より発展させたものと考え

えることができる。目標意識が、学習者の主体的な学習態度に反映され、授業への働きかけを生み出すことを示した点では、両者は共通している。

さらに、国語科授業に対する「したしみ」を感じること(⑧)は、目標意識は全体的な国語指導によって育まれるという指摘(②)と、関係が深い。これらも、国語科教育において目標意識を育むための方法論である。国語科授業のなかに累積的・継続的な取り組みを設けることによって、その取り組みに対する学習者の「したしみ」を喚起できるであろう。また、授業外の場でも国語指導の機会を適切に設けることによって、ことばの学びの機会は身近なところにあるということ、学習者に実感させることができるであろう。

以上より、国語科教育において育成すべき目標意識の内容面と、育成の方法面について、本稿で明らかになったことは、次のようにまとめることができる。

(「学習目標意識」に含まれる内容)

- みずからの言語生活の省察
- 点数や評定とは別の形によることばの力の把握
- 授業への主体的な働きかけ
- 授業への「したしみ」

(「学習目標意識」を育成する方法)

- 過去と現在を比較させる
- 国語の学力について発達段階に応じて理解させる
- 国語科授業内外において、全体的・継続的・累積的な指導を行う

6. おわりに

本稿では、学習者の多様性に即した国語科授業を実現する手掛かりとして、国語科教育における「学習目標意識」のあり方を考察した。

国語科授業において、学習者の多様性に即した、ひとりひとりの主体的な学習を実現することは、容易なことではない。それは、学習者が自分に応じた目標を認識することの難しさ、つまり目標意識を把持する難しさの反映でもある。言語生活を対象とする国語科教育の目標意識には、数値では捉えきれない、ことばによってこそ捉えられる側面があり、そのことが、国語科教育において目標意識を育成することの難しさにつながっていると考えられる。そこで、本稿では青木氏の論考や稿者の実践をもとに、国語科教育において育成すべき目標意識とはどのようなものか、またそれはいかにして育成されるのかについて検討した。

端的に言って、目標意識は極めて個別的なものである。同じ一回の授業のなかでも、学習者ひとりひとり、自分に応じた学習目標をそれぞれに持ち、それを

目指して、みずからのやり方で学習を進めていくことができる存在である。もちろん、その授業に教師の指導目標がないわけではない。しかし、同じ指導目標のもとにあっても、学習者たちの抱く目標意識は、学習指導過程のなかでまるで樹形図のように広がり、多様性に富んだものとなっている。それが、学習者の目標意識の実態である。

こうした実態を踏まえるならば、学習者同士の目標意識を一つに束ねたり、学習者の持つ目標と教師の指導目標とを強いて揃えたりすることは、学習者のちがいに応じるという観点から見て有効とは言えない上、そもそも無理があるということがわかる。むしろ、学習者ひとりひとりに、教師の指導目標や他の学習者のその借り物ではない、みずからの目標意識を育てていくことが、学習者ひとりひとりのちがいに応じた国語科授業の実現につながると考えられる。

国語科教育においては、学習者の言語能力の実態を把握・育成することとともに、「学習目標意識」の実態を把握・育成することも、学習者ひとりひとりを理解する有力な方法であり、学習者の多様性を尊重するための出発点である。

【注】

- 1) 青木幹勇 [1963.8] 「国語科学習指導の目標——子どもの目標意識をめぐって——」『教育研究』飛田多喜雄、野地潤家 [1993] 『国語教育基本論文集成 第一巻』明治図書、pp.299-300
- 2) 吉田裕久 [2006.2] 「国語科で育てるべきことばの力」『日本語学』p.7
- 3) 西尾実 [1956.10] 「ひとりびとりのことばを土台から」『信濃教育』西尾実 [1975] 『西尾実国語教育全集 第七巻』教育出版、p.61
- 4) 野地潤家 [1974.10] 「“学習自覚”にもとづく教授・学習過程を」『現代教育科学』p.50 「学習者相互にみずからのペースで、足どりで、確実に学習目標・修練目標を達成していく、そういう学習過程(同時に、教授過程)を成り立たせることは、至難なことではあるが、不可能ではない。急ぎ足に画一的になりすぎて、“みずから学ぶ”ということを見いだしかねる有様では、当然のこととして学習者を受動的にさせてしまうであろう。」
- 5) 野地潤家、山元隆春 [1993] 「解説」飛田多喜雄、野地潤家 [1993] 『国語教育基本論文集成 第一巻』明治図書、p.465、中略は引用者。
- 6) 注1と同じ、pp.308-309
- 7) 青木幹勇 [1964] 『問題をもちながら読む』明治

- 図書 青木幹勇 [1976]『青木幹勇授業技術集成 第一巻』明治図書, pp.192-193, 中略は引用者。
- 8) 注7に同じ, pp.193-194
- 9) 自己評価の裏返しとして目標意識を捉えるという青木氏の方法は、ポートフォリオ評価の考え方に近い。府川源一郎 [2003.1]「国語科教育目標論の構築に向けて」『国文学解釈と鑑賞』pp.61-62を参照。
- 10) 原田友毛子 [2010.5]「目標意識がある」『児童心理』を参考にした。原田は、「子どもが伸びる時の条件」として、「目標意識がある」ことを挙げ、「学校での教育活動は「目標意識」をいかにして持たせるか、ということの連続である。子どもたちが目標を定めそれを達成しようと活動を開始した時点で、その取り組みは、なかば成功しているともいえる」(p.44)と述べて、学校行事として行われた「持久走大会」に向けた実践例などを報告している。
- 11) 吉田裕久 [2009.9]「国語科は、よくわからない、あいまいな教科か?—国語科の目標・内容の再確認—」『月刊国語教育研究』p.48「国語科はよくわからない教科だといわれる。学習者からも、「国語はいったい何を勉強すればよいのか。漢字の練習と本読みと時たま作文を書くくらい」と。それでも小学生は、まだ国語と算数は基礎教科だからと周囲に励まされて使命感をもって取り組む。が、中・高校生ともなると、英語など新規の主要科目が出てきて、その使命感も薄らいでくる。挙げ句の果ては、「古文や漢文など何の役に立つのか、学ぶ意味などあるのか」と真顔で尋ねられて立ち往生したという体験談を聞くことも一再ではない。」
- 苺谷夏子 [2003]「『大村はま国語教室』への扉」大村はま、苺谷剛彦『教えることの復権』筑摩書房, p.18「算数や理科はいい。きのうまで知らなかったことが、今日はわかったり、納得できたりする。このページを勉強し終えたときに、何がわかっていけばいいのか、小学生の目にも、それははっきりとしていた。何をすればいいのかさえわかれば、勉強もそれほど辛いことではなく、前向きな気持ちで取り組むことができる。(…中略…)でも国語はちがう、と、十一、二歳の私は思っていた。漠然とではあったが。どうも国語はなまぬるい。」
- 12) 注1に同じ, p.300
- 13) 竜田徹 [2010]「書く意欲を引き出し、書く力を育てる実践的試み」『国語教育研究』51, pp.1-10を参照。
- 14) 注4に同じ, p.53「ひとりひとりの学習者の学習による蓄積を見まもり、確かめ、はげまし、その蓄積が実力を生みだしていくこと、これは学習行為の評価ということでもある。みずから貯え、集積していくよろこびは、学習による蓄積のよろこびを本格的なものとする。学習行為みずからを発動させ、軌道にのせ、充実したものにしていくことができるのは、学習による蓄積がたえず学習者に学びがいを感じさせ、学ぶことの真のよろこびを感じさせるからである。」
- 15) 〈A〉などのアルファベットは、書き手の生徒たちを区別するために便宜上付した。①は「コメント王を通して、あなたにどんな力が身についてみたと思いますか。あるいは、あなたのどんなところが鍛えられた、磨かれたと思いますか」の質問に対する回答であり、②は「コメント王への要望や提案があったら書いてください」の質問に対する回答である。
- 16) 毎回、生徒たちが書いたコメントのどれか一つを、「コメント王」として選出してはどうか、という提案である。
- 17) 吉田裕久ほか [2000]「生きて働く力を育てる国語科学習指導の研究3」『広島大学教育学部・関係附属学校園共同研究体制研究紀要』28, pp.78-79
- 18) 注4に同じ, p.307

【付 記】

本稿は、第118回全国大学国語教育学会東京大会（第一日 2010年5月29日）における自由研究発表（発表題目「学習者の目標意識を育成する国語科授業」）を、加筆・修正したものである。

（主任指導教員 吉田裕久）